

## 昭和生まれの明治男より妻へのラブレター

渡部健二

宮城県・六三・会社員

### 前略

日本で初めてのオリンピックが開催された年だったよな。昭和生まれの明治男としては女房を働かせる共稼ぎなどは到底耐えられなかったんだよ。素直に従ってくれたのはうれしかったが、初めての給与日に、

「あら、たったこれっぽち」

には、よくもふんぞり返っていた自尊心を木端微塵にしてくれたもんだ。

お嬢さん育ちだったのかな？ まったくの炊事音痴には参った。覚えているかい俺がカレーライスの作り方を指導したのを。その後あなたの努力もあったのだろうか、なんとかなりましたね。

そこで気が付いたのですが、女は結婚すると年に二歳ずつ歳を積み重ねるように人間の成長をするものだ。

朋江が生まれて三ヶ月目に盲腸の手術をされた時、オシメの取り替え、炊事洗濯とつい、いらいらして、

「気の利いた奴は娘時代に盲腸なんか手術してくるものだ」

のセリフ、あなたはベッドの上で怒っていたよなあ。大分年月は過ぎたが今になって謝っておこう。あの時はごめんよ。

それにしても強くなったものだ。俺は我家の総理大臣のつもりだが、あなたは小沢一郎的存在、別に文句を言っている訳ではない。むしろ後顧の憂なく外で仕事が出来ること感謝している。

ときに俺が死亡しないとおりない保険が、満期になったとのこと、盛大な葬式を考えていると話していましたが、なるべく簡単な式にして残りは、あなたが自由に使って下さい。その方が俺はうれしい。

それよりお願いがある。歌の文句ではないがどんなことがあっても絶対に、俺より先には、死なないでくれ。

あなたを、失うなんて思っただけでも身ぶるいがする、お願いしましたよ。

早々